田の花咲くや祭までの道のり

　このお祭りの企画、開催にあたってあめつちが行ったことをまとめました。マニュアルとまではいきませんが、この先に同じようにイベントを開催される方たちの参考になればと思いまとめました。
　微力ですが、今後の村の活性化の一助となれば幸いです。

企画づくり

　はじまりは、大明神の山並みと田園風景を見てイメージが湧いたことからでした。
　村の人は見慣れてしまっているかもしれないけれど、この風景はとても美しく、この前で早乙女たちが田植えをしたら美しい絵になると思いました。
　奇しくも村の移住者には音楽をされている賀谷宏次さん、長谷川雄一さん、大竹利昌さんがいて、その人たちと交流がありました。

『村内で田植えをしてくれそうな女性も探せばいるだろう。
　もし、いなかったら名古屋や恵那にいる友人を呼ぼう。
　村の歌舞伎や、太鼓、御神楽も一緒にできたら素晴らしい。
　その田植えの風景を映像で流したら、きっとこの魅力に気づいてくれる人たちがいる。
　そしてこの村の人たちも、その魅力を見直してくれるかもしれない。』

　ふとした思いつきでしたが、イメージするほどに輪郭がはっきりして来て、またそれに必要な人材や資源が揃っていて、根拠はないけどうまくいく確信がありました。

　その後、今井勝子先生が村の昔の田植え歌の楽譜をお持ちで再現したいと願っていること、村にがんばる補助金の制度があることを知りました。
　それならば内輪でやるのではなく、村の活性化の一助となるイベントにしたい、と計画をはじめました。

　それから図書館や、映像ライブラリー、ユーチューブ等で昔の田植えや、農村地域での伝統芸能、神道における田植えの意味合い、各地のお田植え神事、昔の田植えの時の衣装、太鼓帯と村の関係、田植えの後に行う早苗饗（さなぶり）について、インターネット、図書館、博物館等を巡り、調べました。

村内でも、昔、田植えがどのように行われていたか、歌や音楽はあったのか、田植えうたを聞いたことがあるか等々を聞いて回りました。

それから現在でも行われている田植えイベントをしている団体も調べ、協力してくれそうなところには連絡を取りました。（残念ながら返事なし）

また、それらにかかる費用を調べました。
参加人数を大まかに計算した上で予算が２０万円なので、その中に納まるように。
衣装、謝礼、音響機材、イベント保険いろいろ。
映像の記録、配信も予定していたのでその相場についてなど。
それを企画書としてまとめました。

その企画書を作っている最中に、主人の知人から大量の古い着物を譲り受けられるという話が舞い込んで来ました。

開催日程は大明神集落営農の安江一成さんに相談の上、田植えにふさわしい時期で、営農に迷惑がかからないときで、梅雨の心配もない時期でと候補を絞りました。

協力者を募る

その上で、賀谷宏次さんに相談、協力をお願いしました。
彼は移住者として先輩であり、この土地で農業で生計を立てていて、
かつ村外問わず音楽仲間とのネットワークがあり、人格的にも音楽隊のリーダーにふさわしいと思ったからです。
彼は他にも音楽を演奏してくれる仲間に声をかけてバンドのメンバーを集めてくれました。

彼の協力を取り付けた上で、美しい村委員会で提案しました。

また、今井勝子先生とお話しし、祭りへの三味線演奏での参加、田植え歌の譜面起こしをしていただくことになりました。

今回は参加者で大きな団体をつくることはしませんでした。
一番の理由は失敗した時に他人を巻き込みたくない。というのが大きな理由です。
私達の中で成功する確信はあるものの、失敗に終わる可能性もありました。
この村で初めての試みであり、開催までに時間が限られている等、不安要素も多くありました。

また、多くの方に関わってもらいたかったので、団体という枠を作らず、協力の方が参加しやすいとも思いました。
それに、大人数だと意思決定に時間がかかります。
開催までの日数を考慮するとそこに費やす時間の余裕がありませんでした。
失敗したり赤字になった時に責任を取る立場として、また、何があっても最後までやり遂げる責任者として『団体は小林裕幸・由佳』だけとしました。

新生　村の田植え歌

その後、起こしてもらった譜面で初合わせ。
しかし、100年前のものであり、譜面も聞き書きなので音がずれていたり、拍子が合わなかったり、そのままではテンポよく田植えができるような曲ではありませんでした。
それを長谷川雄一さんが基本のメロディラインと歌詞はそのままで、細かいところの微調整と曲としてのアレンジを加え、田植えがしやすく、テンポの良い曲に仕上げてくれました。

その後、音楽隊は賀谷宏次さんの自宅で夜の７時から何度も練習を重ねました。
練習は時には深夜に及ぶこともありました。
今井勝子さん、長谷川雄一さん、大竹利昌さんに加え
時には賀谷宏次さんの音楽仲間が恵那から（後藤翔太さん）八百津町から（松本直軌さん）高山から（久米秀憲さん）参加してくれました。

早乙女隊

今回、お祭りではあるけど改まった神事ではない。
神官さんの祈祷は畏れ多い。しかし、お清めはしたい。
そんな中、白川町で舞でお清めの儀式を行うAchicoさんの存在を知りました。
彼女は白川町に移住してきた方で、ご家族で手作業で田植えもしており、協力をお願いしたところ、私の言葉に表現できない想いまで察してくれました。
また、早乙女全員で行う舞と歌（あわの歌）も指導してくれました。
（この舞と歌が参加した早乙女たちにとって何よりの励みになったようです）

次に早乙女の募集。
村の女性に何人かお願いしたのですが、なかなか受けてもらえず難航しました。
（他にも村民の方で歌舞伎の口上を述べてくださる方や、音楽団体にも協力をお願いしたのですが、荷が重い、日程が合わない等、様々な理由でお断りされました。）

そんな中、安江恭子さんが協力してくれることになり、彼女も友人知人に声をかけてくれました。
（その時、檜茶太鼓の今井国光さんを紹介してもらいました。
そのおかげで音響機材を借りることができました。）

しかし、早乙女はなかなか集まりません。
初めての試み、移住して数ヶ月の夫婦の企画、それが映像になり、インターネットで流れ、村の宣伝映像にもなる（かもしれない）・・・
それをやったことのない田植え（しかも手植え）で着物を着て行う。
初めてのことづくしで、確かに村で育った方こそ荷が重く、不安に感じることだったかもしれません。

村長さんからは「村人を巻き込んで欲しい」とのお話があり、努力しましたが、このままでは企画自体が成り立たないと思い、村外でも募集を始めました。

この東濃地区への移住者であり、自分で田植えをしている人を中心に声を掛け、ようやく人数が揃いました。

メンバーが揃ったところで、音楽隊、早乙女隊に分かれて何度か打ち合わせと練習を行いました。
早乙女たちは主に歌と舞の練習、田植えの段取り、衣装合わせ、メイクやヘアをどうするかの相談。
その中で、映像に残るからプロのメイクをお願いしようと考えていましたが、
早乙女たちの希望でメイクもヘアスタイルもナチュラルなもので行くことになりました。
（今にして思えば、田植えなのでその方が自然で良かったです）

衣装は早乙女たちに好みの着物と帯を選んでもらい、身長や足のサイズをきき、その上で白足袋、脚絆、手甲、菅笠を揃えていきました。
手甲は映像にもよく映るので、大竹美佳さんに藍染で作成してもらい、
赤い腰巻きと襷は買うと高いので、全て生地を購入して縫いました。
脚絆は100円ショップで購入。
菅笠は色々なところで比較した上で、ホームセンターで購入しました。

音楽隊の衣装は自分たちが着たい自前の衣装で黒の半纏となりました。

映像について

この祭りの大きな目的の一つとして、この祭りを映像に収め、この村の美しさと共に発信するということがありました。

最初はプロのカメラマンの友人に依頼する予定でいましたが、日程と予算の関係で折り合いが合わず断念しました。
（相場は一日一人30000円＋交通費＋経費。撮影は１日でできても、編集は一週間以上かかる。６万円では良いものはできないと言われました。）

その後、高山からの音楽メンバーから同じ高山に在住の映像作家の高嶋浩さんを紹介してもらいました。
高嶋さんは祭り当時の午後に予定があったものの、予定を調整してくださり、また、予算も相場よりかなり安いものの、受けてくださいました。
（紹介してくれた音楽メンバーとの信頼関係や、この企画の内容が面白そうだったことが大きかったようです）

祭りの数日前にも会場に足を運んでくださり、
・ 当日の段取り
・ 子護神社や田んぼのカメラアングルの下見
・ インタビューに答えてくれそうな村民のリストアップ
等々の打ち合わせを行いました。

また、CATVの古田雅彦さんも当日にドローンも使って撮影してくださることになりました。
ドローンの映像もCATVからの提供ということを明示することで、使わせてもらえることになりました。

宣伝について

企画当初から会場に多くの人を集める予定はなく、対象は徒歩圏内の地元の方と興味のある村内の方だったので宣伝方法ははっきりしていました。
チラシ１００枚。
それを村内の主だった各所に貼ることと、大明神集落での手渡しすること。
開催日の一週間前から朝夕二回、早乙女の衣装を着て、大明神の家々を徒歩で一軒一軒まわりました。（衣装を着ていったのはインパクトを残すのと、目にした人や話題に上がりやすいかと思ったので。）

ポスティングではなく、直接会って祭りのことを話すので一軒にかかる時間は１０分から３０分くらい。長いと1時間以上も。
全戸訪問はできませんでしたが、訪問数に対し、来てくれる割合は多かったように感じます。

同時にFacebookにてページを立ち上げ、随時、情報を発信していく予定でしたが、地元まわりや衣装製作、マスコミの取材等々に時間を取られ、十分には行えませんでした。

その一方、役場の佐々木若菜さんの計らいで新聞社へのプレスリリースを行うことができ、それが功を奏し三社に掲載されました。そのうち一社はわざわざ大明神まで取材に来てくださいました。
また、当日も三社の記者の方が取材してくださり掲載されました。
これは村内の方にも反響が良く大きなプラスになりました。

村民性について

このお祭りを企画、開催する中で何人かの方から村の村民性について聞来ました。
「この村は積極的に手を挙げて何かを始めることは少ないが、
誰かに引っ張られて参加するが、それが嫌じゃない。」
「何かに誘われても最初は少し離れたところから様子見するという人が多い。
まずはお手並み拝見、といった感じ。」
「失敗したら、ほら見たことか、と（なじる）。」

今回、このお祭りに多くの村人に参加の声をかけました。
しかし、上記の村民性のようにやんわりと断られることが多かったです。
表立って反対したり、妨害したりと言った感じもなく、傍観する。

そう言った堅実な村民性だからこそ、この村の暮らしを何世代も受け継ぎ、山や田畑や家を守ってこられたのだと思います。
しかし、何かを変えて行くにはアプローチ方法を考えないと、簡単にはいかないと思いました。
あと、世代的に一番変革を好む高校生、大学生世代が少ないのも大きかったです。

そんな中、村人で積極的な参加は今井勝子さんと安江恭子さんでした。
この二人の尽力がなかったらこの祭は成功しなかったと思います。
きっと「他所から来た人たちが好き勝手やっているわ」と見られたことでしょう。
それほど影響力は大きく、とても感謝しています。

本番前日のリハーサル

前日に子護会館にて1日かけて
・ 参加メンバーの初顔合わせ
・ 子護神社への参拝
・ 会場となる田んぼの視察と田植えの段取りの打ち合わせ
　（今回は車田という円形の田んぼということもあり、試行錯誤しました）
・ 音楽隊のステージセッティング
・ 早乙女の舞から田植えに移る段取り
・ 早苗饗の仕込み　　等々を行いました。

この時に初めてメンバーの心が一つになり、
この１日が成功への大きな鍵となりました。

本番当日

本番は天気にも恵まれ、晴天となり、朝早くからメンバーが集まってくれました。

また、朝早くから竹内良雄さんが来て、一緒に田んぼの線引きをしてくれました。
また神官の安江廣文さんが来てくださり、田の神様や神社への参拝方法のアドバイスをしてくださいました。

当日、早乙女の1人がお子さんの病気のため参加できなくなり、急遽、段取りを変更しました。
それに合わせ、体力に自信のない早乙女たちには苗取り役をお願いしました。

苗取りに関しては田んぼの脇で事前準備をしていると、地元の方々が指導がてら、一緒に手伝ってくださいました。
（映像にも収められています。こういうところに村人の温かさを感じます。）

また、早乙女の田植え終了後の一般参加の田植えでは、地元の方々、役場の方々遠方からの方々、何人もの方が参加してくださいました。
これは本当にありがたかったです。

その後の早苗饗では参加者と共に、地元の方も数人参加して楽しんでくださいました。村内外の良い交流の時間となりました。
また、参加者の方々に労いの時間となるとともに、東白川村の食の豊かさのアピールにもなりました。

甘酒の奉納

最後に2018年の元旦に収穫した玄米を栃山で花つけしてもらい、甘酒としてから子護神社に奉納し、参拝者にも振る舞いました。

今後について

2018年に関しては、同じように田植え祭りをする予定はありません。
理由としては、この企画の目的は
「田植え祭りを行い、その映像を多くの方に見てもらい、
東白川村の良さを村内外にアピールする」というものでした。
祭りは手段であって目的ではく、村の活性化が目的です。

また私達はボランティアであり、このようなイベントで収入を得ているわけではなく、今年も開催するとなると無収入で多くの時間と体力を必要とします。

私たち「あめつち」（小林夫婦）は自分たちの生き方を通して、村の活性化に繋がる生業を創っている最中です。
裕幸は地元の食材（ジビエ肉、地元の米や小麦、野菜、お茶等々）の恵みを生かして、地域に根差した新しい食のカタチを研究しています。
由佳は鍼灸師として自宅開業をしていますが、今後は東洋医学に基づいた養生法を伝えたり、村の植物（檜、茶葉、野草等）を使っての健康法を模索しています。

そして、ゆくゆくは二人の力を合わせて、移住の目的の一つでもあった「ヒーリングカフェ」を始め、村と町との架け橋になることが理想です。

生業を通して村の活性化に繋がる生き方をしてこそ、一過性のボランティアのようになることもなく、地域に根付くことになると考えています。

この３月に裕幸はスリランカへ、４月に由佳は沖縄に行きます。
それぞれがそれぞれの土地で学びを得て、帰ってくる気持ちでいます。
一番エネルギーの高まっている2018年の春に、生業の礎をつくろうと思っています。

それが「あめつち」としての今後の活動計画です。

報告は以上です。

あめつち　小林裕幸・由佳

事業費明細

	合計額	明細	
衣装代	50124	あじろ笠（10個）田植え早乙女用	9800
		あじろ笠（1個）バンド隊早乙女用	802
		早乙女衣装　手甲紐代	519
		早乙女衣装　手甲紐代(追加分)	648
		早乙女衣装　脚絆	1080
		早乙女衣装　脚絆（追加分）	108
		早乙女衣装　安全ピン	216
		早乙女衣装　藍染手甲代	4800
		早乙女衣装　赤色腰巻用布代	7182
		早乙女衣装　腰巻用布、頭布代	4186
		足袋、法被代	20783
宣伝費	9936	チラシ100部	9936
保険代	528	傷害共済保険（22人分）	528
映像編集代	64800	打ち合わせ、収録、編集、交通費	64800
謝礼	17050	早乙女舞指導料、交通費として	8000
		高山市からの交通費（2回分）として	5000
		音響貸与、食材提供のお礼の品	4050
早苗饗代	54237	食材	1108
		食材	4050
		食材	1600
		食材	6000
		食材	2654
		飲料	10454
		調味料	8229
		飲料	8600
		飲料	5300
		飲料・調味料	6242
その他	3375	郵送費(新聞社等)	720
		郵送費（遠方の出演者）	1080
		dvd	1189
		dvdケース	386
合計	200050		200050

その他備考

あめつち負担分	イベント前日食事代	約8000円
	早乙女着物	11人分